

ボランティア活動の有償性が ボランティアの意識に及ぼす影響

—子育て支援活動を事例として—

**Impact of Paid Volunteer Activities on Volunteer Consciousness:
The case of child-rearing support activities**

井出（田村）志穂

Shiho IDE (TAMURA)

(日本女子大学学術研究員)

要 約

これまでの有償ボランティアに関する議論において、さまざまな有償ボランティアの意識をめぐる議論が行われてきた。しかし、ボランティアの意識に有償性がどのような影響を及ぼしたかについては、わずかに先行研究はあるものの、明確な議論がなされていない。

そこで、本研究は、子育て支援における有償ボランティア活動を通して、ボランティア活動の有償性がボランティアの意識にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることを目的として行ったものである。本研究の調査結果からは、ボランティア活動の有償性がボランティアの意識に及ぼす影響として、顧客志向、自己有用感、社会とのつながりの意識をあげられることが明らかになったのと同時に、有償ボランティア活動を契機としたボランティア活動の場の広がりがあることが示された。

[Abstract]

Previous studies have evaluated the consciousness of paid volunteers. Few studies have analyzed the impact of payment on the consciousness of paid volunteers; however, no clear argument has been made.

This study aimed to clarify how payments for volunteer activities affect the perception of volunteers undertaking paid volunteer activities for child-rearing support. The results of a survey conducted as part of this study indicated that the impact of payment on volunteer perception increased client-oriented, self-worth and connection with society. There is an expansion in the scope of volunteer activities as a result of the receipt of payment in volunteer activities.

はじめに

本研究は、子育て支援の有償ボランティア活動を事例として、有償ボランティアの意識に着目し、ボランティア活動の有償性がボランティア自身の意識に及ぼす影響を明らかにすることを目的としている。

ボランティア活動は、自発性（自主性）、公共性（公益性・社会性・連帯性）、無償性といった原則に基づく活動であると説明されてきた¹。しかし、1980年代に「有償ボランティア」と呼ば

れる人々、つまり有償でボランティア活動を行う人々が登場し²、ボランティア活動のあり方は大きな変化を見せた³。有償ボランティア活動の生まれた背景として、以下の2つの点があげられる。

まず、在宅福祉のニーズ増加、地域の繋がり希薄化や核家族化により、地域福祉において行政による一律のサービスではなく、多様な援助が求められてきたことである⁴。とくに、本研究の事例となる、子育て支援における有償ボランティア活動においては、働く女性の数の増加などにより従来の施設保育等では応じきれない変動的・変則的なニーズが生じたり、近年の核家族化・都市化等を背景とした子育ての援助者の減少とともに、多様な子育ての援助が求められるようになってきている⁵。

次に、ボランティア活動におけるコミュニケーションに内在する課題の解決が求められていることである。その課題とは「無償による『たすけあい』がもつ気詰まりやサービス提供の一方通行性⁶」からくる優劣関係であり、有償性によってこの点を解消する目的もあったとされている。

しかしながら、有償ボランティア活動が登場すると同時に、「有償ボランティアはボランティアではない⁷」といった批判も出され、有償ボランティアをめぐる議論が起きた。しかし、以下の2点によって、有償ボランティア活動はボランティア活動の範疇に含まれるものとして認知されるようになった。

第一に、中央社会福祉審議会の意見具申において、有償のボランティア活動は、金銭的利益を目的としたり労働としての対価を求めたりしない非営利の行為であり、ボランティア活動の無償性に含まれると表明されたことである⁸。

第二に、有償ボランティア活動と労働との違いが実証されたことである。有償ボランティア活動は有償の活動であることから、職業等の労働との区別に曖昧さを含んでいるとした議論がされていた⁹。小野晶子¹⁰は有償ボランティアの活動実態と意識のあり方に関してNPO法人に所属して活動する有償ボランティアとNPO法人の有給職員を比較し、その違いを述べている。その際、小野は有償ボランティアの活動実態を検討する項目として、「業務遂行上の指揮監督関係の存否と内容」、「具体的な仕事の依頼、業務指示等に対する諾否の自由の有無」といった「取り決め」の多さに着目し、意識のあり方については、「参加動機」と「労働者としての意識」を検討している。その結果、有償ボランティアの活動実態は、有給職員と無償ボランティアの間の存在であり、意識のあり方でみれば「どちらかといえば無償ボランティアに近い」ことを実証している。

以上のことにより、現在では、有償ボランティアとは有償でボランティア活動を行う者として一般的に認識され始めており¹¹、助け合いのボランティア活動を推進するさわやか福祉財団では、有償ボランティア活動の定義をボランティア活動の「その直接の受益者が謝礼金を支払うボランティア」活動であるとしている¹²。そこで、本研究においても有償ボランティアを「有償でボランティア活動を行う者」と定義する。

有償ボランティアの意識をめぐる先行研究では、ボランティアの参加動機¹³と、ボランティアの意識変容¹⁴に関する知見を見出ししてきた。東根ちよ¹⁵は、有償ボランティアの参加動機は主に「利他的な動機」とボランティア自身の「精神的充実」であることを示し、岡本かおり¹⁶は、子育て支援の有償ボランティア活動をすることによって、「自己充実感や満足」、「子どもや子育てに対する意識」、「地域や地域の人に対する意識」が高まることを明らかにした。これらの報告に

においては、有償ボランティア活動におけるボランティアの意識が論じられているものの、そうした意識に有償性がどのような影響を及ぼしたかについては、明確な議論がなされていない¹⁷。このように、ボランティアの意識に対する有償性の影響に関する先行研究は、ほとんどないといえる。しかし、わずかながら、有償性の影響に関する研究成果が示されているものもあり、それらは「1. 先行研究の検討」に述べる通りである。

そこで本研究は、子育て支援における有償ボランティア活動を事例として、ボランティア活動の有償性がボランティアの意識にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的に行うものとする。

1. 先行研究の検討

以下では、ボランティア活動における有償性がボランティアの意識にどのような影響を及ぼすのか、という観点から分析している先行研究の成果を概観する。

小澤千穂子¹⁸は、介護分野で有償ボランティア活動をしているボランティアを対象として、調査を実施している¹⁹。小澤の調査結果は、有償性がボランティアの意識に及ぼす影響について、以下の2点を示している。

1つめは、有償性がボランティア活動への参入あるいは継続の動機となると同時に、活動の中断の動機ともなることである。小澤は有償性が活動の参入あるいは継続の動機につながる要因について、経済的メリットとなることを報告している。一方、有償性が活動の中断の動機につながる要因については、「料金（謝礼金）を払うことで、協力会員を『家政婦扱い』する人がいる」というケースをあげて、有償性によって「有償ボランティアの存在が利用者から誤解され」、ボランティアが活動を中断する動機となっていることを報告している²⁰。

2つめは、被援助者とボランティアの対等性²¹が保たれることである。つまり、ボランティアは被援助者から不要な気遣いを受けることなく「お互いに気楽」になり、両者の「対等性が保たれる」という。このように、ボランティアは有償性を「互酬性を保つうえで果たす機能」として重視していることが、小澤によって示されている²²。

井出（田村）志穂²³は、子育て支援の有償ボランティア活動のボランティアを対象に調査を実施し、有償性はボランティアの活動に対する責任感を高めることを報告している。この責任感は、報酬を受け取ることによってボランティア自身が「『より責任感』を感じる」ことになり、「減多なことでは休めない」と考え、体調不良や自分の都合で活動を休むことがないようにするものとして示されている。さらに、有償性によって高められた責任感は、「他者や地域、社会のために活動する」社会性の意識を高めることにつながると述べている。ボランティアの社会性の意識を高めるものとして、責任感の他にも、活動を通して得られる自己有用感、地域とのつながりの意識をあげている。

以上の先行研究では、有償性がボランティア活動への参入、継続、中断の動機となること、ボランティアと被援助者の対等性を保つこと、ボランティアの責任感を高めることが明らかにされてきたといえる。

一方で、以下のような疑問は残されたままである。1つめは、ボランティアと被援助者の関係に対する有償性の影響である。小澤は、有償性によってボランティアを「家政婦扱い」と

いったような、ボランティアと被援助者との関係が援助者と被援助者という関係だけではなくなる点を指摘している²⁴。しかし、ボランティアと被援助者の関係がどのような関係に変化するののかという点については十分に分析していない。小野も、有給職員と有償ボランティアとの意識の違いを分析しているものの²⁵、援助者と被援助者の関係には着眼しておらず、ボランティアと被援助者との関係には言及していない。つまり、有償性がボランティアと被援助者との関係にどのような影響を及ぼしているのかという点についてはこれまで十分に分析されてこなかったといえる。

2つめは、有償性がボランティアの社会性の意識を高める可能性があるのではないかという点である。早瀬昇²⁶は、ボランティア活動の有償性によって、ボランティアの社会性の意識は高められにくくなるとしている。早瀬は、ボランティア活動の無償性は「相手が良い状態になることが自分自身にとっても喜びとなる」意識を生み出すのに対し、有償性はそうした意識を生み出す点においては「マイナスに働く」可能性を指摘している。これに対し、有償ボランティア活動においてボランティアの社会性の意識が高まる様子を確認した井出（田村）の研究結果では、ボランティアの社会性の意識を高める3つの要因のうち、責任感には有償性の影響が及んでいることを指摘している。しかし、自己有用感、地域のつながりの意識については、有償性の影響が及んでいるのか、または及んでいないのかということを明らかにしていない²⁷。

3つめは、有償ボランティア活動を契機として、他の社会貢献活動に参入する可能性である。有償ボランティア活動の出現によって、報酬がないのであれば活動しないといった風潮を招くのではないかという、無償ボランティア活動の発展が阻害される危惧も指摘されている²⁸。しかし、これらの問題点に対して、上記の先行研究では、有償性がボランティアの意識に影響を及ぼし、ボランティアの行動にも影響を及ぼしている様子は明らかにされているものの、その範囲は現在実施している有償ボランティア活動における意識や行動に限定されている。これまで、有償ボランティア活動から他の活動への参入については、東根によって示唆されていたものの²⁹、有償性の影響を含めた考察まではほとんど行われてこなかった。

そこで本研究では、以上の「ボランティアと被援助者の関係の変化」、「社会性の意識の高まり」、「他の社会貢献活動への参入」といったボランティア自身に変化が生じる可能性を踏まえて分析を行い、有償性がボランティアの意識に及ぼす影響について検討していくこととする。

2. 研究の対象と方法

(1) 研究対象

本研究では、有償ボランティアを活用して子育て支援事業を行っているファミリー・サポート・センター事業（以下、本事業）に着目した。本事業は、子ども・子育て支援新制度の一つとして位置づけられており、厚生労働省が各地方自治体を通して推進しているものである。本研究では、神奈川県横浜市におけるファミリー・サポート・センター事業を調査フィールドとして取り上げる。横浜市を調査フィールドとしたのは、全国的にも本事業に先駆的に取り組んでいる自治体であるため、本調査の対象としてふさわしいと考えたためである。加えて言えば、筆者自身が横浜市における本事業の会員として活動しているため、広く情報を得やすい環境にある。

本事業は会員制となっており、会員は本事業を実施している自治体の住民である。子育てを援

助して欲しい人（以下、利用会員）、援助したい人（以下、提供会員）が会員登録を行い、地域のファミリー・サポート・センターのコーディネーターを介して、提供会員が有償ボランティアとして利用会員の援助を行うものである。利用会員としても提供会員としても活動する場合は「両方会員」となる。本事業は、すべての子育て家庭が援助の対象となり、自宅などでの子どもの一時預かりや、保育所への送迎などを行う。本事業における有償ボランティアの報酬額は、横浜市の場合、基本的には1時間あたり800円となっている³⁰。報酬金の授受は、利用会員から提供会員に直接行われている。

本研究では、横浜市のA区とB区の提供会員（両方会員を含む）を調査対象とする。A区は横浜市南部に位置しており、その土地に長く住んでいる住民の多い地域である。B区は横浜市北部に位置し、新しくその土地に住み始めた住民の多い地域である。横浜市の地域特性のバランスを考え、長く住んでいる住民の多いA区と、新しい住民の多いB区の両方を調査対象とした。

（2）研究方法

研究方法としては、インタビュー調査を行った。インタビュー調査は半構造化インタビューとして行い、基本的な質問項目は、活動に参加したきっかけ、活動後のモチベーションの変化、有償性の持つ意味、他の活動と本事業の活動との相違点とした。インタビュー対象者は表1に示す通りである。インタビューの際に、インタビューによって得られた回答は匿名として論文に掲載することを伝え、了承を得ている。なお、横浜市内でもっとも本事業の会員数が多く、先駆的な活動も行ってきたB区において、より多くの声を集めるためにB区のみグループインタビュー調査も行うこととした³¹。

表1. インタビュー対象者一覧

〔個別インタビュー対象者〕

	年齢・性別	活動年数	会員種別	活動地域	調査日
A	30代・女性	8年	両方会員	A区	2019.12.11
B	40代・女性	8年	提供会員	A区	2019.12.11
C	60代・女性	3年	提供会員	A区	2019.12.11
D	60代・女性	5年	提供会員	A区	2019.12.12
E	40代・女性	5年	提供会員	A区	2019.12.12
F	40代・女性	1年	提供会員	A区	2019.12.12
G	60代・女性	3年	提供会員	A区	2019.12.12
H	40代・女性	3年	提供会員	A区	2019.12.12
I	50代・女性	15年	提供会員	B区	2020.2.4
J	40代・女性	1年	提供会員	B区	2020.2.5
K	40代・女性	1年弱	提供会員	B区	2020.2.14
L	60代・女性	11年	提供会員	B区	2020.2.14
M	40代・女性	1年	提供会員	B区	2020.2.26
N	50代・女性	8年	提供会員	B区	2020.2.28

〔グループインタビュー対象者〕

	年齢・性別	活動年数	会員種別	活動地域	調査日
M	40代・女性	1年	提供会員	B区	2020.1.20
O	30代・女性	7年	両方会員	B区	2020.1.20
P	40代・女性	1年	提供会員	B区	2020.1.20
Q	50代・女性	4年	提供会員	B区	2020.1.20
R	60代・女性	1年	提供会員	B区	2020.1.20
S	60代・女性	10年	提供会員	B区	2020.1.20
T	40代・女性	5年	提供会員	B区	2020.1.20
U	60代・女性	1年	提供会員	B区	2020.1.20
V	40代・女性	1年	提供会員	B区	2020.1.20

3. 調査結果の分析

「1. 先行研究の検討」で示した3つの視点, 「ボランティアと被援助者の関係の変化」, 「社会性の意識の高まり」, 「他の社会貢献活動への参入」から調査結果を分析し, 有償性がボランティアの意識に影響している様子をとらえ, 次の3つの点に整理した。1点目は有償性がボランティアの「顧客志向の意識」を高めていること, 2点目は有償性がボランティアの「自己有用感, 社会とのつながりの意識」を高めていること, 3点目は有償ボランティア活動を契機とした「ボランティア活動の場の広がり」があることであった。それぞれについての詳細は, 以下で述べる。なお, 【】内の言葉は筆者の発言であり, ()内の言葉は筆者が補足した言葉である。

(1) ボランティアと被援助者の関係の変化－顧客志向の意識の芽生え

調査の結果からは, 先行研究と同様に, 有償性がボランティアの責任感を高めていることが確認できた。その様子は, 子どもを安全に預かるというボランティア活動を遂行するのみだけでなく, 有償性の影響によってボランティアと被援助者の関係を「サービス提供者と顧客」としてボランティア自身が捉え直し, 対価を受け取ることにより被援助者のニーズに応えるサービスを提供しようとする「顧客志向」の意識が芽生えているといえるような様子が見られた。つまり, ボランティアが被援助者から報酬を受け取ることによって, 被援助者のさまざまな要望に応えようとする姿が見受けられたのである³²。有償ボランティア活動に対する責任感について, Iさんは次のように話している。最初は「手が空いたらちょっと預かる」つもりで活動を始めたIさんだったけれども, 実際に活動を始めて報酬を受け取るようになると「しっかりとやらなきゃ, ケガさせて返さないようにとか(略)っていう感覚」を持つようになった。「謝金の発生によって, しっかりとね, (略)お母さん(被援助者)の意向にそって, (預かる)時間や, ごはんを食べる時間とか, お母さんの希望を叶えてあげたい」という。これらの語りから, Iさんは報酬を受け取っているからには, 被援助者からの要望に可能な限り応えたいと考えて活動していることが読み取れる。このことは, 労働者という概念で表現されるのではなく, 顧客志向の意識を抱いて活動しているといえるものであろう。

一方で, 有償性による顧客志向の意識の芽生えは, 活動の中断につながる可能性も含んでいる。それは, ボランティア自身が報酬金額を高額であると捉えた場合である。この点は, Eさんの語りによって示唆されている。活動の報酬について質問した際, Eさんは「ゼロ円じゃない, ちょうどいい金額」と語り, 続けて次のように語った。「もっと高い金額だと, 依頼をいただいた時点で『やらなきゃいけない』みたいな。(略)『それ(自分の予定)を断って, 受けなきゃいけないかなあ』みたいなプレッシャーになっちゃうので。そうなっちゃうと, ちょっと続かないかなあ」このEさんの語りは, ボランティアが報酬金額を高額であるととらえた場合に, 被援助者の要望に必ず応えなければならない立場であると感じるようになり, 活動を継続していくことが難しくなることを示している。

(2) 社会性の意識の高まり－自己有用感, 社会とのつながりの意識

調査結果から, 自己有用感, 社会とのつながりの意識の2つを有償性が高めている様子も見られた。まずは, 有償性によって自己有用感が高められているLさんの事例を紹介したい。Lさん

は無償の保育ボランティア活動をして20年ほどになる。無償の保育ボランティア活動も、有償ボランティア活動である本事業の活動においても、Lさんには「お母さんを支えたい」気持ちがあるという。Lさんの活動している時の気持ちを無償ボランティア活動と有償ボランティア活動とで比較した場合、「やっぱり、提供（有償ボランティア活動）の方が『ちょっとお役に立てたかなあ』って感じるかしらね。お金をいただいてお預かりするわけだからねえ。そこは大きいかもしれないよ」という。Lさんが「お金をいただいて」いる点で「お役に立てた」という実感を得ていることは、言い換えれば有償性が自己有用感を高めているといえるだろう。なぜ有償性が自己有用感を高めるのか。それはEさんの「自分が何かしたことに対するちょっとした金額っていうのは、あるとうれしい」という語りから推察できる。つまり、ボランティアは有償性を「自分が何かしたことに対する」他者からの評価としてとらえているため、有償性がボランティアの自己有用感を高めているのではないかと考えられる。

次に、Mさんの語りからは、有償性が社会とのつながりの意識を高めている様子を読み取ることができる。Mさんは「無償だったら社会とつながっていないというわけではない」と前置きしながらも、「子育てだけになってしまうと、視野も狭く³³」なり、社会的な関係性が限られている状況の中で、「有償性がつくことによって、社会とつながっていられてるっていう気持ちの充実感がある」と語っている。

ボランティアの社会性の意識を高める要因として、自己有用感、地域とのつながりの意識が指摘されていること³⁴を踏まえれば、上記のLさん、Eさん、Mさんの語りからは、有償性が自己有用感、地域（社会）とのつながりの意識という2つの意識を高めることによって、ひいては社会性の意識を高めることにつながっているといえるだろう。

（3）他の社会貢献活動への参入—ボランティア活動の場の広がり

上述したような有償性によるボランティアの意識の変化がある中で、ファミリー・サポート・センター事業での有償ボランティア活動から別のボランティア活動へと、活動の場の広がりが確認された。今回の調査結果から以下の3つの事例を取りあげ³⁵、先行研究において未着手となっている、有償ボランティア活動を契機としたボランティア活動の場の広がりについて整理していく。

1つめは、活動で得た報酬を寄付しているというUさんのケースである。もともと多くの無償ボランティア活動をしてきたUさんは、ボランティア活動が「有償ということに抵抗」を感じていた。しかし、活動の報酬を別の社会貢献活動に「カンパをしたり」して「有効に使う」ことによって、Uさんは充実感を得ながら活動を続けられているという。このことから、Uさんは活動の有償性を活用して、寄付活動という別の社会貢献活動へと場を広げているといえる。

2つめは、本事業の活動を機に、別の有償ボランティア活動に参入したEさんのケースである。Eさんは「報酬は、何となくオマケ、じゃないけれど。でもゼロ（無償）だと、完全なボランティアだと、なんていうのかな。ちょっとは、もらいたいっていうのはある」と語っている。Eさんは、無償ボランティア活動には参入しにくいと感じていたけれども、有償ボランティア活動であるならばと、有償性に後押しされるようにしてボランティア活動に参入した。活動に参入する以前から、困っている人を援助したいという意欲が「もりもりだったわけじゃない」とも

語っている³⁶。しかし、活動を重ねるうちに自分の活動が「相手の助けになっている」と実感し、より被援助者の助けになるようにと、本事業よりも報酬金額の低い別の有償ボランティア活動に参入している³⁷。このEさんのケースから、報酬金額の差異によらない、有償ボランティア活動の場の広がりがある点を確認できた。

3つめは、本事業の活動を機に、無償ボランティア活動に参入したNさんのケースである。Nさんは「誰かのお役に立てれば」と思って活動に参入し、障害のある子を援助した。Nさんは援助活動を通して、現在の社会は障害のある人にとって障壁が多いことに気づいて「ガラッと世界が変わり」、「障害のある子が」少しでも生きやすく生活できるように、今私たちができることをやって」いこうといった社会に働きかけていく意識が芽生え、無償ボランティア活動や社会貢献活動に参入している³⁸。Nさんは、本事業の活動に参入する際に、自分が活動依頼を引き受けるかどうかの「判断材料」として活動報酬をとらえており、有償性がNさんの活動への参入動機に影響していた。しかし、本事業での活動をきっかけに参加したチャリティマラソンのボランティア活動については、Nさんは「無償ボランティアという認識」で「交通費も不要（自転車で行けるため）」として申し込みをした」という。このNさんのボランティア活動の場の広がりにおいては、活動するかどうかの判断材料に「有償性」が含まれていないことから、ここに、有償ボランティア活動から無償ボランティア活動への活動の広がりも確認できたといえる。

おわりに

本研究は、子育て支援活動における有償ボランティア活動を事例にして、ボランティア活動の有償性がボランティアの意識にどのような影響を及ぼすか、を明らかにしてきた。ボランティア活動の有償性は、ボランティアの意識に「顧客志向の意識の芽生え」、「社会性の意識の高まり」といった影響を与え、それに加えて別の有償ボランティア活動や無償ボランティア活動へと参入していく「ボランティア活動の場の広がり」といった点でも影響が見られた。

このことから、有償性によってボランティア活動への参入を促されたボランティアは、たとえボランティア活動へ参入した理由として社会性の意識を含んでいない場合であっても、有償性の影響によって社会性の意識を高めていくことが確認できた。さらに、そのような意識の変化を経て、ボランティアは無償ボランティア活動を含めたボランティア活動の場を広げていることが明らかになった。それはつまり、ボランティアが被援助者から報酬を受け取ることによって、他者からの評価（社会とのつながりの意識）や相手の助けになっている実感（自己有用感）を得て、被援助者のニーズに応えようと活動する（顧客志向の意識）なかで、地域の困っている人を援助したいという社会性の意識が高まっていくといえる。そしてそのことが他のボランティア活動への参入につながっていくといった一連の流れが見えた。有償ボランティア活動は、有償性の影響によって社会性の意識の薄い人々に対しても社会性の意識を高めるという点で、無償ボランティア活動を阻害するというよりも、むしろ有償ボランティア活動によって無償ボランティア活動を含む他の社会貢献活動へと活動の場が広がり、それらの活動の発展に寄与する可能性を明らかにしたといえるだろう。

最後に、有償ボランティア活動をめぐる先行研究に対して、本研究がどのような批判的な知見を提供できるかを述べる。先行研究においては、有償性がボランティアと被援助者の関係にどの

ように影響しているのか十分に考察されておらず、有償性によって社会性の意識が高まりにくいといった指摘や他のボランティア活動の発展を阻害する可能性が危惧されている。これに対して、本研究の結果ではボランティア活動の有償性がボランティアの社会性の意識を高めることを明らかにし、無償ボランティア活動など他のボランティア活動の発展に寄与する可能性を示したといえる。

本研究で取り上げた事例は、横浜市をフィールドとした子育て支援における有償ボランティア活動であるため、数多くある有償ボランティア活動の一例に過ぎない。本研究で提示した仮説をもとに、多様な有償ボランティア活動における有償性の意味を引き続き検討していくことが必要である。

-
- 1 土志田裕子『ボランティアに関する文献収録・解題 ボランティア活動の本質的性格（要約）』東京ボランティア・センター，1991年。伊藤俊夫「ボランティアの無償性」日本ボランティア社会研究所ボランティア学習事典編集委員会『まあるい地球のボランティア・キーワード145—ボランティア学習事典』春風社，2003年，p.214。早瀬昇『「参加の力」が作る共生社会：市民の共感・主体性をどう醸成するか』ミネルヴァ書房，2018年。
 - 2 家事援助及び介護の有償ボランティア活動を先駆的に実施している神戸ライフ・ケア協会は1983年に設立されている。土肥隆一「有償ボランティア活動とその課題」『都市政策』48号，1987年，pp.42-53。
 - 3 有償ボランティア活動を実施した理由について，神戸ライフ・ケア協会元事務局長の土肥は「有償，無償の論議よりも差し迫った在宅福祉ニーズにだれが，どう答えるのかが問題なのである」と述べている。土肥隆一前掲書，1987年。
 - 4 仁平によれば，1980年代初期より在宅福祉，特にホームヘルパーのニーズが増えていく中で，財政支出の抑制が強いためにホームヘルパーの十分な雇用ができず，無償ボランティアによる援助も難しかったため，ヘルパーとボランティアの「間」の活動の存在として「有償ボランティア」に関心が向けられるようになったという。仁平典宏『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会，2011年，pp.339-341。
 - 5 労働省「少子化対策・ファミリー・サポート・センターの手引き（抜粋）—仕事と育児両立支援特別援助事業の趣旨，仕組みと概要—」『勤労者福祉情報』第546号，1999年，pp.84-93。
 - 6 全国社会福祉協議会・住民主体による民間有料（非営利）在宅福祉サービスのあり方に関する研究委員会「住民参加型在宅福祉サービスの展望と課題：住民主体による民間有料（非営利）在宅福祉サービスのあり方に関する研究委員会報告書」1987年，p.125。
 - 7 鈴木幸子「有償ボランティアはボランティアなのか」『月刊ゆたかなくらし』第85号，1989年，pp.42-45。
 - 8 中央社会福祉審議会地域福祉専門分科会「ボランティア活動の中長期的な振興方策について（意見具申）」1993年。
 - 9 福祉労働者の価値を曖昧にするものであるといった批判（井上千津子「『有償ボランティア』に思う」『ホームヘルパー』第168号，1985年，3頁）や，最低賃金制度を含む労働を曖昧にさせるものとした批判があった（東京都社会福祉審議会「東京都におけるこれからの社会福祉の総合的な展開について（答申）」1980年）。
 - 10 小野晶子「『有償ボランティア』は労働者か？」『日本労働研究雑誌』49巻，2007年，pp.77-88。
 - 11 一方で，「ボランティアと呼ぶのは止め，『有償スタッフ』などと呼ぶべき」とした，「有償ボランティア」という呼称に関する疑問は見受けられる（早瀬昇前掲書，2018年，p.57）。
 - 12 さわやか福祉財団『いわゆる有償ボランティアのボランティア性：より継続的で，より深いボランティア活動を推進するために』2019年，p.1。

- ¹³ たとえば、有償ボランティア活動への参入の動機を報告している文献として、以下があげられる。井上清美『『子育てを支援する』人々の意識とジェンダー—A市ファミリー・サポート・センター事業への調査から—』『家族研究年報』第29号、2004年、pp.69-79。山下亜紀子「育児支援者の動機付けに見る地域型育児支援の展望」『国立女性教育会館研究紀要』第8巻、2004年、pp.39-50。女性労働協会『ファミリー・サポート・センター活動状況調査結果報告書（平成17年度）』、2006年。松尾純代「顔と顔がわかりあう地域の人のつながりづくり～大阪市ファミリー・サポート・センター事業—」『はらっぱ』第264号、2006年、pp.30-33。岡崎和美「ファミリー・サポート・センターの現状と今後の展望—要支援事例と専門機関との連携課題に着目して—」『高知女子大学紀要 社会福祉学部編』第57号、2008年、pp.81-92。松井剛太「ファミリー・サポート・センターの副次的意義に関する検討—高齢者の「生きがい」に注目して—」『香川大学教育学部研究報告書 第1部』第131号、2009年、pp.21-28。
- ¹⁴ たとえば、有償ボランティアの意識変容に関する報告として、以下があげられる。脇信明「ファミリー・サポート・センター事業における援助活動の実態と課題についての考察—別府市ファミリー・サポート・センター事業より—」『別府溝部学園短期大学紀要』第33号、2013年、pp.51-59。堀越秀美・中山優子・福島きよの「地域子育て支援の『相互援助活動』に関する取組—NPO法人すずらん『まかせて会員』のアンケート調査から—」『ヘルスサイエンス研究』第20巻第1号、2016年、pp.59-63。堀越秀美・中山優子・福島きよの「地域子育て支援の『相互援助活動』に関する取組—ファミリー・サポート・センター事業利用後のアンケート調査から—」『ヘルスサイエンス研究』第21巻第1号、2017年、pp.87-90。
- ¹⁵ 東根ちよ「ファミリー・サポート・センター事業を支える会員の意識—「有償ボランティア」活動の意義と課題—」生協総合研究所編『生協総研賞・第11回助成事業研究論文集』生協総合研究所、2015年、pp.21-45。
- ¹⁶ 岡本かおり「相互援助型子育て支援参加者の意識変化に関する研究—ファミリー・サポート・センターにおける活動を通して—」『応用教育心理学研究』第28巻第1号、2011年、pp.43-55。
- ¹⁷ 東根の研究において、援助活動の良い点に関する質問に対し「援助費がもらえる」という回答が33.3%と低くない割合であったことから、ボランティアは有償性を「実際に援助活動を行う上では良い点」として認識していることは明らかになっている。東根ちよ前掲書、2015年、p.32。
- ¹⁸ 小澤千穂子「有償ボランティアの参加動機と活動継続意志の維持要因・阻害要因—世田谷ふれあい公社協力員へのケーススタディによる検討—」『大妻女子大学紀要家政系』第34号、1998年、pp.221-231。
- ¹⁹ 小澤によれば、「いわゆる『住民参加型福祉サービス』によるヘルパーであり、福祉公社や社会福祉協議会・民間非営利団体等から派遣される有償のボランティア」を対象としている。有償ボランティアには、NPO法人のスタッフとして活動をする有償ボランティアもいれば、子育て支援や介護の現場で活動する有償ボランティアもいる。本研究ではより広い視野で有償ボランティアをとらえるため、有償性がボランティアの意識に及ぼす影響に関する実証研究は、活動分野に限らずすべて検討することとする。なお、有償ボランティアの意識に関する研究において、調査対象とされているのは、そのほとんどが子育て支援における有償ボランティアである。本研究の先行研究として検討するもののうち、介護分野の有償ボランティアを対象としている研究は小澤である。小澤千穂子前掲書、1998年、p.221。
- ²⁰ 小澤が調査対象とした有償ボランティア活動では、有償ボランティアの呼称が「協会員」となっている。小澤千穂子前掲書、1998年、p.233。
- ²¹ ボランティア活動の有償性は「対等性」をねらいとして、ボランティア活動に導入され始めた経緯がある。全国に先駆けて有償ボランティア活動を実践し始めた、神戸ライフ・ケア協会の事務局長を務めていた土肥は、有償性を導入したねらいは、利用者とボランティアの対等な立場を保ち、利用者が余計な気を使わないようにするためとしている。「少ない額であっても、やはり金を取っている以上謙遜につながる。ボランティアが謙遜を学ぶことは大切である」という理由である。土肥隆一前掲書、1987年、p.47。
- ²² 小澤の調査の結果には、「知らない人にただで、では相手の気がすまないのです。もらっても困るよ

- うなものをいただくよりは、あまり相手の負担にならない金額でもらった方が、お互いに気楽です」といった語りや、「もらうことにより、相手との対等な関係を保つことができると思う」という語りが見られた。小澤千穂子前掲書、1998年、p.233。
- 23 井出（田村）志穂「子育て支援における有償ボランティアの意識：ファミリー・サポート・センター事業を事例として」『日本学習社会学会年報』第15号、2019年、pp.99-107。
- 24 小澤千穂子前掲書、1998年、p.233。
- 25 小野晶子前掲書、2007年。
- 26 早瀬昇「第1章第1節『ボランティア』の語源とそのキー概念」早瀬昇・筒井のり子『ボランティアコーディネーション力第2版－市民の社会参加を支えるチカラ ボランティアコーディネーション力検定公式テキスト』中央法規出版、2017年、pp.12-36。
- 27 井出（田村）志穂前掲書、2019年、p.102。
- 28 たとえば、京極高宣はボランティア活動の有償性によって、「金が出なければつまらないといった風潮を生み、無償ボランティア活動の発展を阻害するのではないかと述べており、このことからボランティア活動の発展への危惧がうかがえる。京極高宣「新しい介護サービスのあり方をめぐる問題構造－『有償』ボランティア、時間貯蓄、チケット制などについてどう考えたらよいか』『日本社会事業大学研究紀要』第40号、1994年、pp.135-151。
- 29 東根によれば、ボランティアが有償ボランティア活動の「実施主体であるNPO法人が運営するほかの子育て支援事業に関わる」場合があることを報告している。東根ちよ「ファミリー・サポート・センター事業の実施状況と課題－4センターにおける聞き取り調査を通じて－」『同志社政策科学研究』第16巻第1号、2014年、pp.87-103。
- 30 横浜市子ども青少年局「横浜子育てサポートシステム」<<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kosodate-kyoiku/kosodateshien/supportsystem.html>>2021年9月13日アクセス。
- 31 インタビュー対象者のMさんは個別インタビューとグループインタビューともに対象者である。
- 32 本事業における活動の基本的なルールは決まっているものの、細かい内容や対応についてはボランティアと被援助者間で決めることになっている。
- 33 Mさんは幼稚園に通うお子さんがいて、仕事をしていない自分自身の状況について「子育てだけになってしまうと、視野も狭くなってしまふ」と表現している。
- 34 井出（田村）志穂前掲書、2019年。
- 35 3つの事例の他にも、明確なターニングポイントは語られなかったものの、他の社会貢献活動に参入している様子が見えた。たとえば、Aさんは「A区の保育ボランティア（本事業とは別の有償ボランティア活動）っていう（略）それを今年度から始めて。（略）あと、子どもの施設のお手伝い（有償ボランティア活動）をしに行っていて。（略）子サポ（本事業）があったから、その保育ボランティアにもつながったりとか」していると語っている。次に、Mさんは、本事業の事務局スタッフに「こんなものもありますけれど、興味があればどうですかって紹介されて、（別の有償ボランティア活動を）始めました」と、自身の活動の場の広がりについて語っている。
- 36 Eさんは、活動に参入した動機について「自分の子がどんどん大きくなってしまふて（さみしさを感じ）、小さい子と関われることもある」活動である点や、有償の活動であった点を語っている。
- 37 Eさんは報酬金額が本事業よりも低い、別の有償ボランティア活動として、同じ方を援助することになった。Eさんは「【金額が低くなくてもお役に立てるなら構わないということですか？】そう、そうですね。はい。（略）そのおうちが一番いいようにしてあげる感じですよ（略）私がいなかったら、その方が困っちゃうので」と語っている。
- 38 具体的には、障害について理解するための講座を受講したり、点字を勉強し始めたり、チャリティマラソンのボランティアとして働いたりするようになったという。
- 39 早瀬昇前掲書、2017年。京極高宣前掲書、1994年。

